

石薬師東古墳群・石薬師東遺跡(第4次)

発掘調査概報

—— 鈴鹿市石薬師町 ——

1 9 9 6 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター

序

平成7年1月17日午前5時46分、兵庫県淡路島北部周辺を震源とする地震が occurred。震度6の烈震、マグニチュード7.2という大地震のため多数の家屋は倒壊し、広域の火災も発生しました。このため6,000人以上の尊い命が失われ、30万人にも及ぶ人々が避難生活を余儀なくされました。いわゆる阪神・淡路大震災であります。

この忌まわしい災害を教訓にして、三重県でも防災体制の見直しを行うとともに、その一環としての三重県消防学校の施設・設備の充実は急務であると考えます。

しかしながら、この三重県消防学校の所在する鈴鹿川中下流域北岸の台地上には、有数の古墳群や遺跡が密集しており、ここに報告する石薬師東古墳群・石薬師東遺跡もその一角を占めております。

平成5年度から三重県消防学校の新築および施設・設備整備事業が計画され、これに伴って発掘調査を行ってまいりました。これまでに古墳は15基確認され、遺跡もこの古墳群の東北に広がる事が判明しております。また、古墳の形がすべて方墳で、ある程度企画的に造られていることや、周溝の底に遺物が意図的に据え置かれた状態から何らかの祭祀の可能性も考えられています。

今回ここに石薬師東古墳群・石薬師東遺跡の第4次調査の概要を報告いたしますが、新たに方墳15基が確認され、これで計30基以上の方墳から成り立つ古墳群であることが判ってまいりました。県内でも方墳が中心となる古墳群は稀で、この地域の歴史を考える上で貴重な資料となりました。本書が、文化財保護の啓発と研究の進展に幾ばくかでもお役にたてれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して御協力を賜りました三重県環境安全部消防防災課、三重県消防学校、鈴鹿市教育委員会、石薬師町の皆様をはじめ地元の方々との関係各位に厚く感謝を申し上げます。

平成8年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

例 言

1. 本書は、三重県鈴鹿市石薬師町字寺東に所在する石薬師東古墳群および石薬師東遺跡（第4次）の発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 本調査は、三重県教育委員会が三重県環境安全部より執行委任を受けて、平成7年度三重県消防学校施設・設備整備事業に伴って実施したものである。
3. 調査は、下記の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会			
調査担当	三重県埋蔵文化財センター			
	主事	服部芳人	筒井正明	伊藤裕之
	技師	日榮智子		
	研修員	松菜和也		
4. 調査にあたっては、三重県環境安全部消防防災課・総務部管財管繕課・三重県消防学校・鈴鹿市教育委員会・三重県農業開発公社・（有）練木建材・鈴鹿市シルバー人材センター・および地元各位の方々に御協力を頂いた。
5. 発掘調査後の出土遺物の整理は上記担当者の他、管理指導課が行った。
6. 本書は服部・筒井が執筆し、分担は目次に明記した。また、全体の編集は服部が担当した。
7. 図版を作成するにあたっては国土調査法による第VI系座標を基準とし、方位の座標は座標北を用いた。真北はN 0° 18' W、磁北はN 6° 40' W、それぞれ座標北から振れている。（平成6年）
8. 本書で報告した記録及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。
9. 写真図版の遺物の番号は、実測図の番号と対応させてある。
10. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前 言	(服部)	1
1・調査に至る経過と方法		1
2・調査日誌(抄)		2
II. 位置と環境	(筒井)	3
III. 調査成果	(服部)	5
1・A地区		6
2・B地区		10
3・C地区		10
4・D地区		10
5・E地区		12
6・F地区		12
7・G地区		12
8・試掘・立会調査区		13
IV. 小 結	(服部)	19
1・規模について		19
2・方向について		19
3・時期について		19
4・位置関係について		20

図版目次

図版1	A・B地区全景	21
図版2	A地区、49号墳、41号墳、45号墳筒形器台出土状況、48号墳遺物出土状況、 B地区28号墳遺物出土状況、C地区全景、D地区全景	22
図版3	E地区、F地区全景、G地区全景、G地区遺物出土状況、 41・42・43・44・45・47・48・34号墳出土遺物	23
図版4	28・49・39・54・32・53・32・45・48号墳出土埴輪	24

挿図目次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡地形図及び調査区位置図	4
第3図	遺構配置図	5
第4図	A・B地区遺構平面図	7~8
第5図	D地区遺構平面図	11
第6図	C地区遺構平面図	11
第7図	F地区遺構平面図	11
第8図	E地区遺構平面図	11
第9図	G地区遺構平面図	12
第10図	出土遺物実測図(1)	14
第11図	出土遺物実測図(2)	15
第12図	出土埴輪実測図	18
第13図	A・B地区古墳配置図	20

表目次

第1表	古墳一覧表	13
第2表	出土遺物観察表(1)	16
第3表	出土遺物観察表(2)	17
第4表	出土埴輪観察表(円筒埴輪)	18
第5表	出土埴輪観察表(形象埴輪)	18

I. 前 言

1・調査に至る経過と方法

三重県教育委員会では、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内の文化財の確認および、その保護に努めている。こうした中、平成5年度に三重県総務部消防防災課から、三重県消防学校設備・設備整備事業計画の照会を受けた。この事業地内は、石薬師東遺跡（県番号9903・市番号727）および石薬師東古墳群（県番号9930～9954・市番号754～778）の北西隣接地にあたる（古墳群は一部含まれる）。そこで詳細な遺跡の実態を把握するために、平成5・6年度の2ケ年にわたり、試掘調査を実施した。平成5年度試掘調査は鈴鹿市教育委員会が、平成6年度試掘調査は三重県埋蔵文化財センターが担当した。その結果、石薬師東遺跡については周知の遺跡範囲が北東方向に広がり、また石薬師東古墳群については、現練習グラウンドおよび消防学校施設にまでおよぶことが確認された。調査必要面積は、15,000㎡以上という膨大な広さとなった。

この取扱いについては、その保護に努めるよう三重県総務部消防防災課・三重県消防学校と、三重県教育委員会文化振興課・三重県埋蔵文化財センター間で再三協議を重ねたが、現状保存が困難なためにやむなく発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

発掘調査は平成5年度に、グラウンド予定地南西部分で石薬師東26号墳を第1次調査として1,100㎡を行い、平成6年度には、グラウンド予定地の北東の外周道路部分で石薬師東遺跡を第2次調査として2,060㎡を4月から6月にかけて行った。また、同年度11月から翌年1月にかけて現グラウンド内等に2,319㎡を第3次調査として行った。このように事業地内では上記のように昨年度までに第3次調査までを行い、平成7年度は第4次調査として行うこととなった。

平成7年度は、三重県の機構改革の年でもあり、県総務部消防防災課は県環境安全部消防防災課に、

県文化振興課は県文化芸術課に組織改善された。また、新たな三重県消防学校施設の完成予定も平成9年4月となることから、平成7年度の発掘調査は早期実施を迫られていた。しかしながら、現在の三重県埋蔵文化財センター職員の定数では、農林水産部・土木部などの他の公共事業に伴う発掘調査を行うことで例年精一杯の状況である。そこで担当職員の人員増をすること、土木部門を三重県農業開発公社に委託すること、現場作業員を増員することなどで、その解決を図った。

発掘調査は、三重県消防学校施設工事計画予定及び消防学校練習計画と絡めながら、県環境安全部消防防災課・三重県消防学校と県教育委員会文化芸術課・三重県埋蔵文化財センター間での協議の末、今年度は6,300㎡を本調査することになった。その内、5,300㎡をまず優先的に行い、その後残り1,000㎡を行うという計画であった。調査は平成7年4月10日から開始し、同年9月1日に全て完了した。その後の協議により、工事の進捗との兼ね合いから255㎡の工事立会調査を実施した。

上記の本調査6,300㎡の内訳は、A地区3,700㎡・B地区1,400㎡・C地区100㎡・D地区100㎡・E地区400㎡・F地区300㎡・G地区300㎡である。A地区・B地区については、ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を行い、遺構の測量はトータルステーションによる地上図化を行った。その他の地区に関しては、過去の調査区との合成のため、国土座標値を入れて平板測量図化を行った。

調査における地区割り、100m四方を大地区（0A～2C）、20m四方を中地区（1～25）、4m四方を小地区（1～25）とした平成6年度の設定を踏襲して行った。また、古墳群の名称は、昨年度40号墳まで確認しているため、今年度は41号墳から命名した。

今年度は昨年度と打ってかわり、5月の連休明けから梅雨の走りと思われる雨に祟られて、調査も思うように捗らない毎日を過ごした。また、調査区内には過去の施設（陸軍第1気象連隊・県立家畜増殖

基地農場・県立看護学校)の基礎や擾乱などが縦横無尽にはしり、古墳の周溝が思うように検出できない状況もあった。しかも、消防学校の訓練や、工事施工も行われながらの調査であることから、発掘計画にも支障をきたす場面もあった。それでも、無事調査が終了できたのは、一重に作業に従事して頂いた地元の方々の努力の賜物である。ここに御名前を記して、感謝の意を表したい。

伊藤和代	伊藤玉子	宇佐美藤子	打田麗子
大嶋絹枝	岡いづみ	岡田佐太郎	岡田美晴
片岡満寿子	川北澄子	川北昭二	川原せつ子
熊倉ヨシ子	黒田まさ子	桑原うた子	小泉節子
古山美佐枝	酒井巳紀子	坂倉義也	坂本しげ子
坂本やゑの	清水はる	鈴木美恵子	田中重治
辻 宏	遠山節子	長谷川次枝	萩森俊男
林よし子	広田ツヤ子	堀之内一哉	牧村正巳
松永初子	松永光治	松村鉄夫	松村幸雄
南 正美	南 美穂	宮口政子	村居典子
吉田淳子		(敬称略・50音順)	

2・調査日誌(抄)

4月10日	表土除去・道具搬入
4月17日	作業員投入・41号墳検出
4月24日	42号墳から須恵器蓋・身出土
5月8日	45号墳から須恵器筒形器台出土
5月10日	41号墳終了
5月24日	43号墳終了
5月25日	48号墳から円筒埴輪出土
6月2日	35号墳・49号墳検出
6月5日	47号墳終了・C区D区の地区設定・48号墳円筒埴輪出土状況図
6月6日	34号墳検出
6月7日	49号墳から鶏形埴輪出土
6月12日	D区表土掘削
6月15日	午前雨のため作業中止・午後C区D区遺構検出
6月16日	C区作業終了・49号墳埴輪の下から須恵器器台・高杯など出土
6月19日	B区遺構検出・C区D区図面

6月20日	39号墳から須恵器甕・高杯・土師器壺出土・50号墳検出
6月21日	49号墳から形象埴輪出土・外国人研修エリック・チェン氏視察
6月26日	午前雨のため作業中止・32号墳より土師器甕出土
6月27日	49号墳全景写真撮影
6月28日	32号墳から須恵器杯身出土
7月4日～6日	雨のため作業中止
7月7日	28号墳検出
7月11日	49号墳東側が造出し状になると判断・28号墳埴輪多量に出土
7月12日	49号墳遺物取り上げ終了
7月13日	28号墳から形象埴輪出土・36号墳検出
7月15日	現地説明会開催・130名参加
7月17日	午前雨のため作業中止・28号墳より人物埴輪出土
7月18日	28号墳から武人埴輪の釈出土
7月19日	ラジコンヘリコプター・スカイマスターによる撮影・A区43・45・46号墳の拡張区表土掘削
7月20日	午後43・45号墳掘削
7月21日	午後43号墳平板測量
7月25日	拡張区調査終了
7月27日	G区表土掘削
7月28日	F区表土掘削
8月1日	G区53号墳検出
8月2日	E区表土掘削
8月3日	53号墳から須恵器甕・高杯・土師器壺など出土
8月7日	54号墳から須恵器蓋出土
8月11日	G区終了・55号墳から形象埴輪出土
8月17日	55号墳東側造出し確認
8月25日	作業員終了
8月29日	E区・F区平板実測
9月1日	現地協議・現地引き渡し
9月6日～7日	G地区の南北に試掘調査
8年3月4日～6日	工事立会調査

II. 位置と環境

石薬師東古墳群（1）は鈴鹿川下流域北岸、標高約40mの台地上にあり、三重県消防学校およびその周辺に位置する。行政上は鈴鹿市石薬師町字寺東である。

鈴鹿川流域は現在でも国道1号線が走るように、古代以来現在に至るまで、一貫して畿内と東国を結ぶ交通路の要地として認識されてきた。飛鳥時代から平安時代の律令期に、遷都等の政治的变化に伴う官道ルートが変更されても、畿内と東国を結ぶ古代の東海道が一貫して当遺跡周辺を通過する。これは、当遺跡東方約1kmに伊勢国分僧寺跡（2）や国分尼寺跡（3）が、また西方約6kmには近年の調査で近江国府と類似する政庁跡が確認され、伊勢国府と認定された長者屋敷遺跡（4）が位置するように、当地域周辺が律令期の伊勢国における政治・宗教の中心地であったからこそである。

この古代東海道は、壬申の乱の際に大海人皇子達

のとった大和国吉野から美濃国への逃走経路や、美濃国で結集した大海人軍の倭古京への進軍路であった状況から、少なくとも飛鳥時代には官道として機能していたと思われ、また『記紀』神話における日本武尊の東征伝承は、このルートが飛鳥時代以前から機能した可能性を反映するものかもしれない。

この地の古代官道が飛鳥時代には確立されていたことは、鈴鹿川流域が伊勢国内での古墳密集地のひとつであることが関係するのであろう。鈴鹿川流域の古墳は、中流域の両岸および下流域の北岸の、概ね3地域で首長墓が展開されたと思われ、中流域北岸の能美野王塚古墳（全長90m）、南岸の愛宕山1号墳（全長68m）、下流域北岸の寺田山1号墳（全長70m）（5）などの4世紀代に遡る古墳が築造されたことから、このころには該当地域で首長権が確立していたと思われ、中流域ではその後も系統的な首長墓が展開される。



第1図 遺跡位置図（1：50,000） [国土地理院 鈴鹿 1：25,000から]

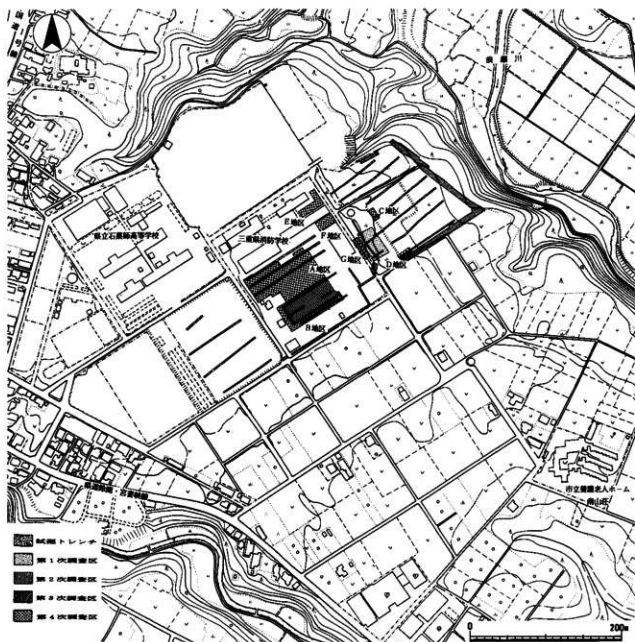
これに対して、下流域では顕著な首長墓を確認できず、その系統的な発展が見られないともいわれてきた。しかし、当古墳群の位置する丘陵上や、園分町から高岡山にかけての丘陵上には、富士山古墳群（6）や寺田山古墳群（7）等多数の古墳や古墳群が位置するにもかかわらず、調査例が少なく、かつ多くの古墳が既に消滅しているため、不明な点が多いといわざるを得ない。

たとえば、かつて計25基の古墳が確認されていた石栗師東古墳群を含め、周辺の多くの古墳は、第2次世界大戦中の軍事施設建設等のために盛土部分に削平を受け消滅したものとされ、乗鞍古墳（全長44

m）（8）などがろうじて現存する状況である。前述のように律令期の中心地域はむしろ下流域であり、古代～中世に確認できる在地勢力である大鹿氏の存在ともあわせ、下流域での古墳調査による資料の蓄積が必要となっている。

このような状況下で、南山6号墳（9）の調査が実施され、横穴式石室を主体部とする6世紀後半の築造と判明した^⑩。石栗師東古墳群でも、3次にわたる発掘調査により、5世紀末から6世紀前半と思われる方墳の周溝部分が合計15基分検出され^⑪、この地域における古墳の資料が確認されつつある。

ところで、多くの方墳が鈴鹿川流域に位置し、方



第2図 遺跡地形図および調査区位置図（1：5,000）

墳築造集団の存在が指摘されている⁹⁾。中には、蛸田古墳(10)、北野古墳(11)、深溝狐塚古墳(12)の横穴式石室を持つ方墳もある。また、中ノ川流域の寺谷古墳群も、5世紀末から6世紀前半の方墳を

主体とすることが判明している¹⁰⁾。方墳を主体とする石室東古墳群の調査は、この地域を考える上で、多くの資料を提供するであろう。

- ① 尾形龍野『平安京から伊勢神宮へへの古代の道』葦原野矢の道(第2巻) 法蔵館 1998
- ② 西尾保『伊勢国分寺(5次) 長谷郡東濃郡(1次)』奈良県教育委員会 1993
- ③ 新田剛『伊勢国分寺・国府跡』奈良県教育委員会 1994
- ④ 藤原秀樹『伊勢国分寺・国府跡2』奈良県教育委員会 1995
- ⑤ 田中勝弘『伊勢一宮(河内郡)』『古墳時代の研究』第10巻 雄山閣出版 1990
- ⑥ 奈良県教育委員会『三重県 奈良県遺跡地図』1987

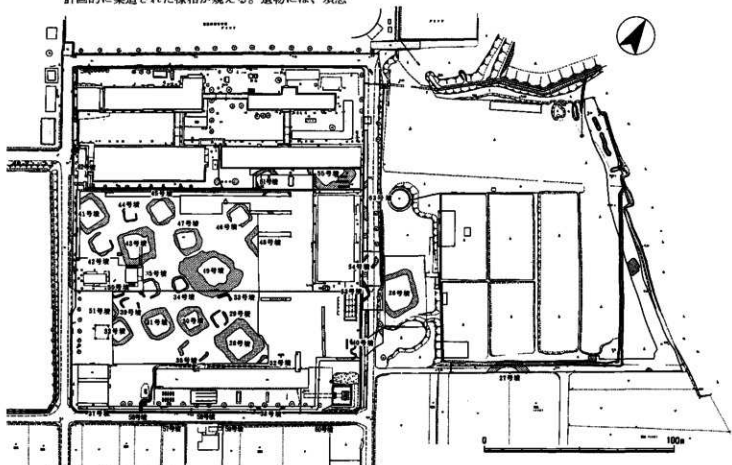
- ⑦ 新田剛『南山遺跡・南山4号墳』奈良県教育委員会 奈良県遺跡調査会 1991
- ⑧ 三重県地域文化センター『三重県地域文化センター年報5』1994
- ⑨ 三重県地域文化センター『三重県地域文化センター年報6』1995
- ⑩ ②に同じ
- ⑪ 新田剛『蛸田古墳』奈良県教育委員会 奈良県遺跡調査会 1991
- ⑫ ②に同じ

Ⅲ. 調査成果

今回の調査区は、訓練グラウンド部分・消防学校の建物に挟まれた部分および新グラウンド部分などに、A地区からG地区の7カ所に設定された(第2図)。検出された遺構は、古墳17基・中世墓1基である。古墳はすべて方墳で、墳丘は削平されているが周溝からは須恵器・土師器・円筒埴輪・形象埴輪が出土した。墳丘規模は、一辺約13.5mの古墳(28・49・55号墳)から一辺約4mの古墳(54号墳)まで様々存在する。しかし、各古墳の方向はほぼ一定で、計画的に築造された様相が窺える。遺物には、須恵

器の筒形器台(45号墳)をはじめ巫女・武人などの人物埴輪(28号墳)、馬・鶏・家などの形象埴輪(49号墳)なども出土している。また、須恵器・土師器が、周溝底近くで掘えられた状態で出土した古墳(39・41・42・53号墳)もある。

以下に各地区の概要および各古墳の概略を報告するが、検出した古墳の規模・方位などは第1表を、また主な出土遺物については第10～12図、第2～5表を参照されたい。



第3図 遺構配置図(1:2,000)

1・A地区（第4図）

この場所は消防学校の宿泊棟および管理教育棟建設予定地で、平成6年度発掘調査の第3次調査区の北西部分に当たる。調査面積は、3,700㎡である。現況は訓練グラウンドであり、一面アスファルト舗装がなされている。層位は、このアスファルト（約10cm）の下に約10cmの礫石が敷かれ、以下黄褐色の盛土が10～20cm程度あり、その下が赤褐色粘質土の地山となる。ただし、東に向かうにつれて盛土と地山の間に暗褐色土が入る。この暗褐色土には磨滅の著しい埴輪片や昭和時代の構造物の瓦・コンクリートや礫が混入しており、造成工事における盛土と思われる。おそらく昭和の構造物がこの地に建てられる度に造成を行い、西から東の方向に土の移動があったと考えられる。その昭和時代の構造物とは前言でも触れたが、陸軍第1気象連隊・県立家畜増殖地農場・三重県立看護学校、そして三重県消防学校のことである。

陸軍第1気象連隊の発足は、1942年11月のことである。当時、岐阜県各務原市の陸軍中部131部隊航空気象隊で気象教育を行っていたが、新しく第1気象連隊を編成することとなり、鈴鹿市石薬師町に新兵舎を建設することとなった。ここには30数棟の兵舎が建てられていたとされ、今回の発掘調査においても兵舎の建物基礎と思われる溝跡・柱穴を確認しており、調査区に平行してここに数棟建てられていたようである。また、塹壕と思われる痕跡も検出している。長さ約4m、幅約1m、深さ約1.5mの長方形を呈した穴で、両側から階段上に降りられる様に掘られている。当時の遺物である青色の星印が記された陶器類・建物に葺かれていた瓦なども出土している。瓦には「埼玉30」「群馬2」と印刻されたものも含まれる。

その後、昭和30年代には県立家畜増殖地農場がこの地に建設されたが、このA地区には果樹栽培の農場が存在していたようである。調査区の北東部分には幅約30cmの溝が平行に30数条、またこれらの溝を区画する形でL字状の幅約70～80cmの溝も検出された。これらの溝が、果樹栽培の農場に伴うものと思われる。そして、昭和40年代には三重県立看護学校が建設され、この校舎が今の消防学校に引き継が

れ、現在に至る。

この様に様々な施設が度々この地区に建設され、古墳の墳丘は削平されてしまっているが、墳丘を取り囲む周溝は検出できた。この結果、このA地区には古墳が11基存在していたことが確認できた。これらの古墳はすべて方墳であり、しかもほとんどが北を主軸に考えると東に約30～40°傾いている。そこで、便宜上古墳の中心から現校舎に向かって、右上の溝を北溝、左上を西溝、右下の溝を東溝、左下の溝を南溝として記述する。したがって、東溝と西溝に直行する方向が東西方向、北溝と南溝に直行する方向が南北方向となる。なお、墳丘規模の数値については周溝間の内法である。

(1) 41号墳（第4・10図）

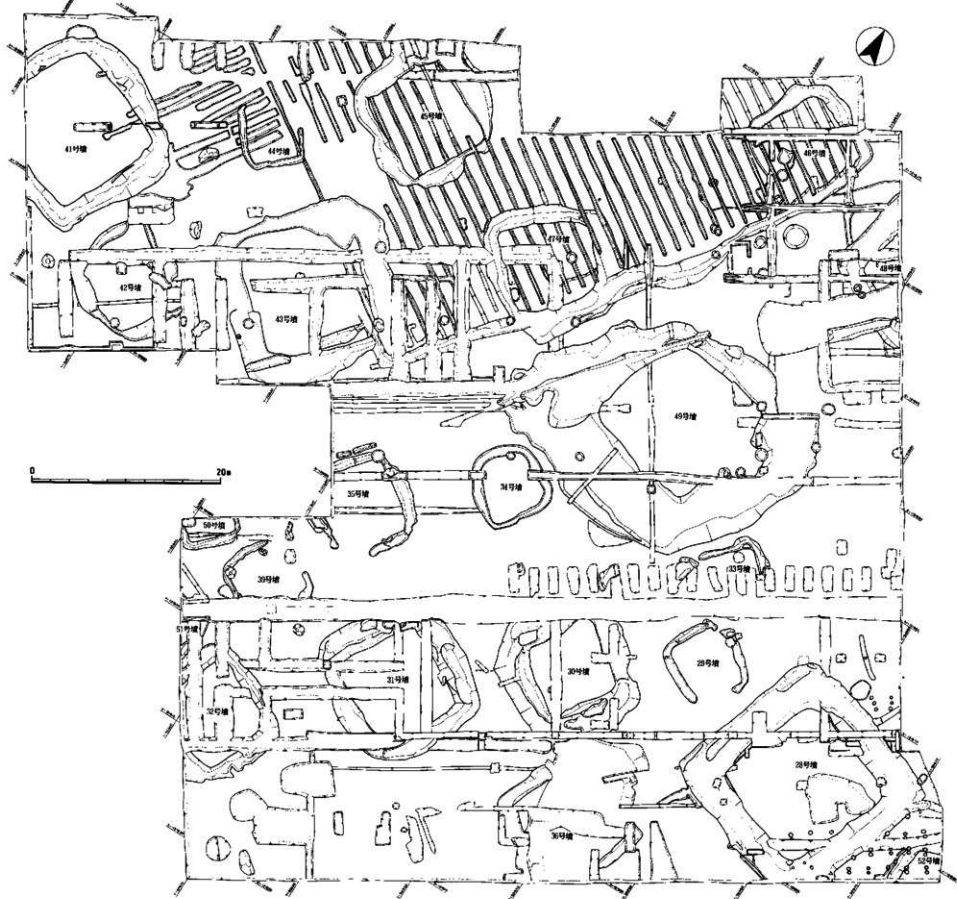
調査区の北西隅で検出した。南溝および西溝は調査区外となるため全掘はできてない。東西13.5m、南北12.6mのやや東西方向に長い方墳である。周溝の内側は直線的であるが、外側は曲線である。特に北溝は東・西隅の幅が狭く、中央が広く弧を描く感がある。周溝内からは、須臾器杯身（1・2）・杯蓋・高杯（3～5）・甕・器台（7・8）、土師器高杯、円筒埴輪が出土している。特に、南溝からは周溝の底近くで須臾器甕・器台がその場で割られた様な状況で出土している。

(2) 42号墳（第4・10図）

41号墳の東で検出した。北溝が昭和の攪乱により確認ができず、南北方向の規模は不明であるが、東西方向の規模は9.3mを測る。南溝は、41号墳の南溝とはほぼ一直線に揃い関係が深いと考えられる。東溝のやや南寄り、須臾器の杯身2個（10・11）・杯蓋1個（9）が周溝底で並んで出土した。杯身2個は正立状態、杯蓋1個は倒立状態での出土である。

(3) 43号墳（第4・10図）

調査区の中央西寄りで検出した。西溝の北隅は、昭和の攪乱を受けていびつになる。41・42号墳と比べると周溝の外側もやや直線的で、幅が一定の感がある。東西10.0m、南北11.8mの規模を測る。遺物は北溝と東溝に集中する傾向にあり、器種も須臾器高杯（12～15）・甕・壺（16～20）がその大半を占める。



第4図 A・B地区および第3次調査区遺構平面図(1:400)

(4) 44号墳 (第4・10図)

41号墳の北東で検出した。西溝および北溝の西半分は検出できなかった。古墳の規模が東西6.0m、南北5.6mとA地区では最小で、周溝の幅も60cmと狭い。しかも、北から49°東に触れるなど他の古墳とはやや趣が異なる。遺物は東溝から須恵器杯蓋1個体(21)が倒立状態で出土しただけである。

(5) 45号墳 (第4・10図)

44号墳の北東で検出した。東西10.2m、南北9.0mのやや長方形を呈する。周溝の形態は41・42号墳と同様、内側は直線的で外側は曲線である。北溝は外側に弧を描くが、東溝と南溝は中央部分が狭く、周溝の深さもこの部分が浅くなる。また、周溝断面形は概ね内側が垂直に掘り下げられ、外側は傾斜がなだらかなのである。遺物は、東溝から須恵器の筒形器台1個体(24)がほぼ完形で出土した。この筒形器台は、墳丘に据え置かれていたと仮定するならば、東溝に倒れた状態、すなわち口縁部分を東に向けている。この器種は、三重県内では亀山市の井田川茶臼山古墳・大山田村の鳳凰寺などでも見つかった。また、他の遺物は、北溝で土師器壺、須恵器杯身(22・23)・杯蓋が出土しただけである。

(6) 46号墳 (第4図)

調査区の北東隅で検出した。東溝および南溝は、家畜増殖基地農場時代の耕作溝によって削平を受けているために判然としないが、東西8.7m南北8.2mの規模である。また、周溝の内側外側ともに直線的で、幅は一定の感がある。遺物は、東溝から土師器碗が、西溝から須恵器甕片が出土している。

(7) 47号墳 (第4・10図)

調査区のはほぼ中央で検出した。東溝は、耕作溝がほぼ重なって掘られているため、東西方向の規模は判然としないが9.0m前後であろう。南北は9.6mを測る。南溝の中央部分は幅も狭く、浅い。遺物は、西溝・北溝・東溝で須恵器杯身・蓋・脚付壺(25・26)・壺(27)・甕(28)、円筒埴輪が出土している。

(8) 48号墳 (第4・11・12図)

46号墳の東で検出した。南溝および西溝のL字状に検出できたが、東溝・北溝は調査区外である。46号墳と南溝が一直線上になり、関係が深いと思われる。

遺物は、南溝の中央から須恵器甕がその場で割られた様な状態で出土した。また、西溝の北寄りで須恵器杯身(29)・蓋(30)・甕・円筒埴輪(62~65)などが出土した。円筒埴輪は4個体以上あり、墳丘裾から周溝へずれ落ちたような状況での出土である。

(9) 49号墳 (第4・11・12図)

調査区の中央東寄りで検出した。東西13.4m、南北13.0mの規模である。周溝の内側は直線的であるが、外側は各溝それぞれいびつである。特に南溝は幅が広い。また、この古墳は大きく攪乱を受けているため判然としないが、東側中央部に南北6m、東西2.5mの造り出し状の突出部がみられる。この突出部については、墳丘が削平を受けているため築造時に盛り土が存在していたかは不明で、この部分の周溝が浅い可能性も残される。なお、遺物は様々な器種が周溝から多量に出土している。土師器壺、須恵器杯身・杯蓋・甕・高杯(31~33)・器台・線(34)・偏平短頸壺(35)などの他、円筒埴輪・形象埴輪(66・67)もある。形象埴輪には、人物埴輪・鶏形埴輪・馬形埴輪・家形埴輪がある。これら形象埴輪は南溝に、須恵器は北溝に集中する傾向が見られる。特に北溝の須恵器には、周溝底で割られた様な状態の甕・高杯などがあり、何らかの祭祀の可能性も考えられる。

(10) 34号墳 (第4・11図)

49号墳の南で検出した。第3次調査で南東隅だけ確認しているが、今回の調査で全貌が判明した。東西6.2m、南北5.9mの規模である。周溝の平面形態はやや台形状を呈する。49号墳の南溝によって立地の制約があった感もある。出土遺物には、須恵器杯身・杯蓋・高杯(36)などがある。

(11) 35号墳 (第4図)

34号墳の南西で検出した。東溝・南溝は第3次調査で検出済みで、今回北溝および西溝を確認した。周溝の南西隅は調査区外であるが、全体に四隅は狭く浅い。特に南東隅は、途切れている。遺物は、第3次調査の東溝から人物埴輪が出土しており、今回調査の北溝からは土師器壺・須恵器杯身・高杯が出土した。

2・B地区（第4図）

第3次調査区の南東部分に当たり、調査区はL字状を呈する。この部分は、駐車場予定地である。基本的には、A地区と同じ層位の状況であるが、地山直上の暗褐色土が厚く、検出面は現地表から80～100cm程度である。この地区もA地区と同様、昭和の攪乱が多く古墳の周溝を完全な形で検出したものはない。なお、L字状調査区の南隅部分に古墳の空白部分もある。

(1) 28号墳（第4・11・12図）

調査区の北東部分で、古墳の東溝および南溝を検出した。第3次調査で北溝・西溝を確認しており、これらほぼ全貌が判明した。東西13.5m、南北13.0mを測る。周溝は内側と外側はほぼ平行であり、幅は3～4mである。古墳規模が大きいためか、周溝の深さは40～50cmあり、他の古墳に比べると深い。遺物は、第3次調査での北溝から土師器の小形短頸甕が4ないし5個体L字状に据え置かれたような状態で出土している。また、西溝からは円筒埴輪も出土している。今回調査の南溝・東溝からは須恵器杯身(38)・杯蓋(37)・高杯(39)などをはじめ円筒埴輪・形象埴輪(66～71)が出土した。特に形象埴輪には人物埴輪(巫女?)・武人埴輪が背中に背負う奴(71)などがあり、南溝から出土した。このように南溝・東溝と北溝・西溝では出土遺物の内容に違いが見受けられる。A地区の49号墳でも南溝から形象埴輪が多く出土しており、共通する傾向があるものと思われる。

(2) 32号墳（第4・11図）

L字状の調査区北西の短辺部分で検出した。第3次調査で周溝北東隅の輪郭を確認していたが、今回の調査でおおよその全貌が検出された。ただし、南西隅に関しては調査区外である。昭和の攪乱のために、周溝は何方か分断されているが、東西9.0m、南北8.5mの規模を測る。東溝、南溝の輪郭は内側が直線的で、外側は弧を描く感がある。遺物は北溝から土師器甕が、東溝から須恵器杯身(43)・杯蓋(40～42)・甕(44)が出土した。

(3) 36号墳（第4図）

L字状の調査区の長辺中央で検出した。この古墳のほぼ中央に南北方向で昭和の攪乱があり、検出で

きたのは、東溝の一部と南西隅の部分だけである。東西方向は10.3m、南北方向の規模は不明である。出土遺物も須恵器甕片にとどまる。

(4) 39号墳（第4・11図）

A地区の35号墳の南で検出したが、南東隅および東溝は昭和の攪乱溝によって削平を受けており確認できなかった。規模は、東西6.2m南北6.6mである。周溝の北西隅は途切れる。遺物は、西溝から須恵器甕1個体と、須恵器高杯(45・46)の上に土師器甕が乗せられた状態で出土している。

(5) 50号墳（第4図）

39号墳の西側で検出した。東側半分の確認で、西側については調査区外であるため、東西方向の規模は不明である。南北方向は、5.1mである。なお遺物は出土していない。

(6) 51号墳（第4図）

32号墳の西側で検出した。北東部分のみの確認であり、規模については不明である。遺物も須恵器杯蓋片が出土したにとどまる。ただ、北溝が32号墳の北溝と一直線上に揃い、関係が深いと思われる。

(7) 52号墳（第4図）

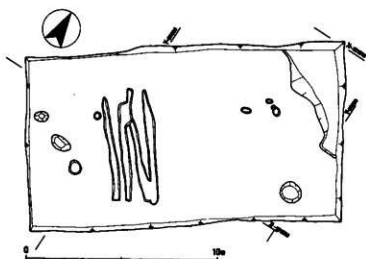
B地区の東端で検出した。北西部分のみの確認であり、規模は不明である。出土遺物は、須恵器甕片にとどまる。

3・C地区（第6図）

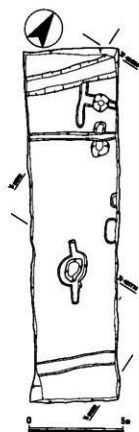
第1補助塔建設地の東端にあたる。調査区は東西5m、南北20mの100㎡で、検出した遺構は溝数条と攪乱土坑のみである。溝からは土師器片、陶器片が出土しただけで時期決定には至らない。

4・D地区（第5図）

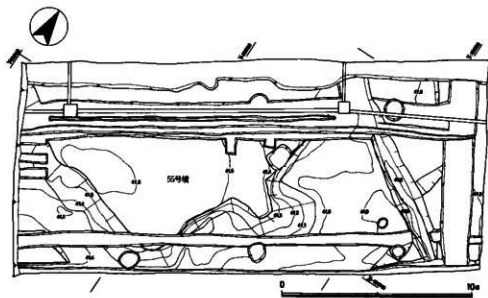
グラウンド予定地内の東南隅に位置し、主訓練塔に至るスロープ予定地の東端にあたる。東西17m、南北10m、調査面積は170㎡である。27号墳と26号墳の間であり、古墳の存在も予想されたが、柱穴数個・溝数条と落ち込みを確認したのみである。柱穴・溝からは遺物が出土しておらず、時期は判然としない。また、落ち込みは調査区の北東隅で検出した。周溝の一部である可能性も考えられるが、遺物が含まれず、今回は落ち込みとして報告する。



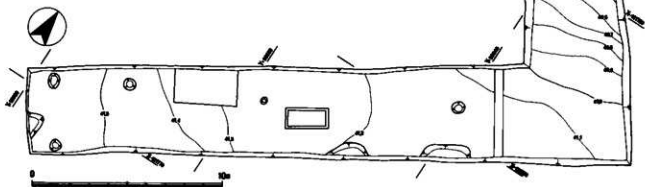
第5图 D区遗構平面图 (1:200)



第6图 C区遺構平面图
(1:200)



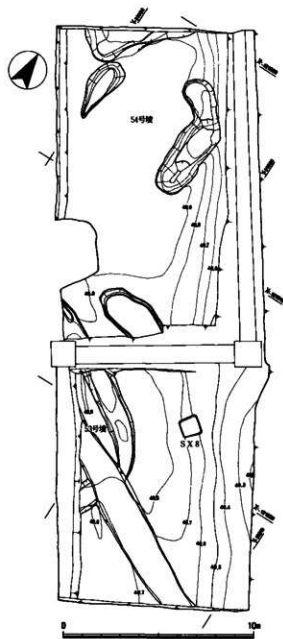
第7图 F区遺構平面图 (1:200)



第8图 E区遺構平面图 (1:200)

5・E地区（第8図）

宿泊棟と食堂とに挟まれた部分に、L字状に調査区を設定した。幅6m、東西方向33m、南北方向に23mの調査面積300㎡である。この地区では、県立看護学校当時の池の跡と、陸軍の建物基礎を確認しただけで、明確な遺構は検出できなかった。検出面は、南から北の方向に傾斜しており、南端と北端では約1.3mある。これら昭和の建物の削平によって遺構が確認できなかったのではなく、もともとこの付近が丘陵の北端にあたり、徐々に谷地形に変化するため、遺構は存在していなかったと判断した。



第9図 G区遺構平面図（1：200）

6・F地区（第7図）

屋内訓練場と宿泊棟とに挟まれた部分で、調査に入るまでは消防学校生の訓練施設が設置されていた所である。東西方向に25m、南北方向に11m、調査面積は275㎡である。訓練施設による攪乱や宿泊棟からの排水管などによって削平を受けてはいたが、古墳の周溝1基を検出することができた。

(1) 55号墳（第7図）

調査範囲に限られているため、確認できたのは東溝と南溝および北溝の一部である。東西方向の規模は不明であるが、南北方向は約13.7mである。A地区の49号墳とB地区の28号墳と並び、この古墳群では大きい部類の古墳である。また、東側中央に南北2m、東西2mの造り出し状の突出部がみられ、平面形態も49号墳に類似する。遺物は、土師器甕をはじめ、須恵器杯身・杯蓋・甕・高杯・器台などと種類も多い。また、円筒埴輪・形象埴輪も出土している。特に、形象埴輪は南溝から南東隅部分に集中する傾向が見られ、28号墳・49号墳と同様な状況を示している。

7・G地区（第9図）

屋内訓練場の北東に位置し、第1次調査区の南西部分にあたる。消防学校を外周する旧市道部分でもある。この地区では、26号墳の周溝南西部が確認されるものと思われたが、市道による削平のために検出できなかった。調査区は、東西方向10m南北30mの300㎡という狭い調査面積であったが、他の古墳2基と中世墓と思われる遺構1基を確認することができた。

(1) 53号墳（第9・11図）

調査区の南西隅で検出した。確認できたのは、北溝と東溝の一部である。南北方向の規模は不明であるが、東西方向は7.0m前後であろう。遺物には、北溝から須恵器杯身（47・48）・高杯（49～56）・甕（60）・壺（58・59）の他、土師器の壺（57）がある。これらの遺物は、周溝の底近くに掘え置かれた様な状態で出土しており、完形品も多い。何らかの祭祀が考えられそうである。

(2) 54号墳（第9・11図）

調査区の北側で検出した。東溝・西溝と北溝の一

部の検出である。南北方向の規模は不明であるが、東西方向は約4.2mである。この古墳群では、最小の部類である。規模が小さいにもかかわらず、周溝の深さは40～50cmあり、特に南東隅が一番深い。しかも、古墳の向きも他の古墳群と異なり、やや異なる存在である。単独の土塚墓の可能性も考えられるが、今回は古墳として報告する。出土遺物は、須恵器杯蓋(61)が1点北溝から出土した。

(3) S X 8 (第9図)

53号墳の北東で検出した。1m四方の正方形形状を呈し、残存する深さは約30cmである。約3cm程度の厚みで焼土が遺構を取り囲み、埋土は暗褐色土に炭

化物が混じる。遺物は出土しておらず、時期の決定はしがたいが、平面形態から中世墓と判断した。

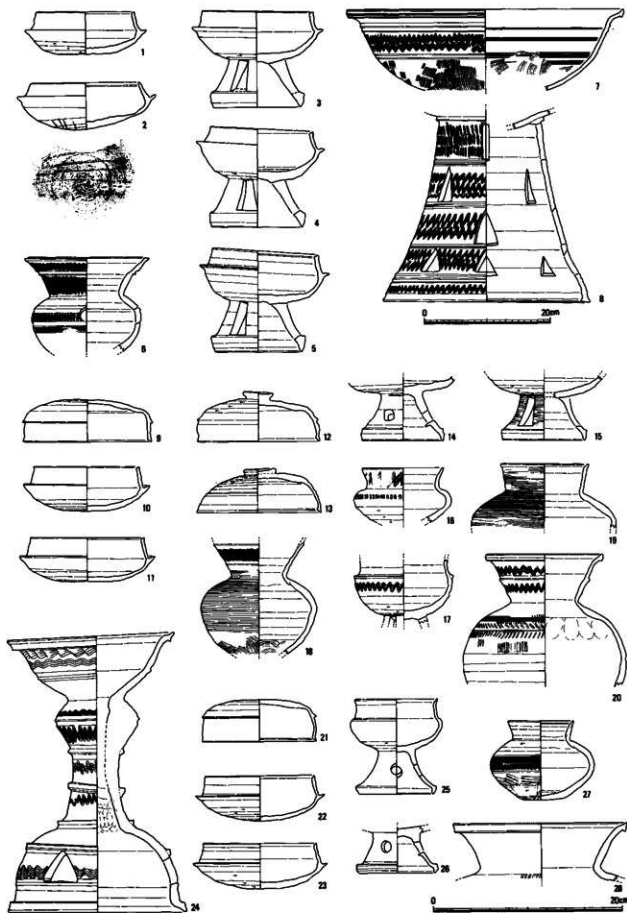
8・試掘・立会調査区(第3図)

本調査の終了後、G地区南側・北側延長部分で試掘調査を、またA地区北側およびF地区西側などで立会調査を行った。試掘調査では、一辺約20mの方墳(63号墳)の北溝・西溝の一部を検出した。F地区の西側では、一辺約9mの方墳(61号墳)の西溝・南溝の一部を検出し、またA地区の北側では規模は不明であるが、古墳の周溝(62号墳)を確認している。

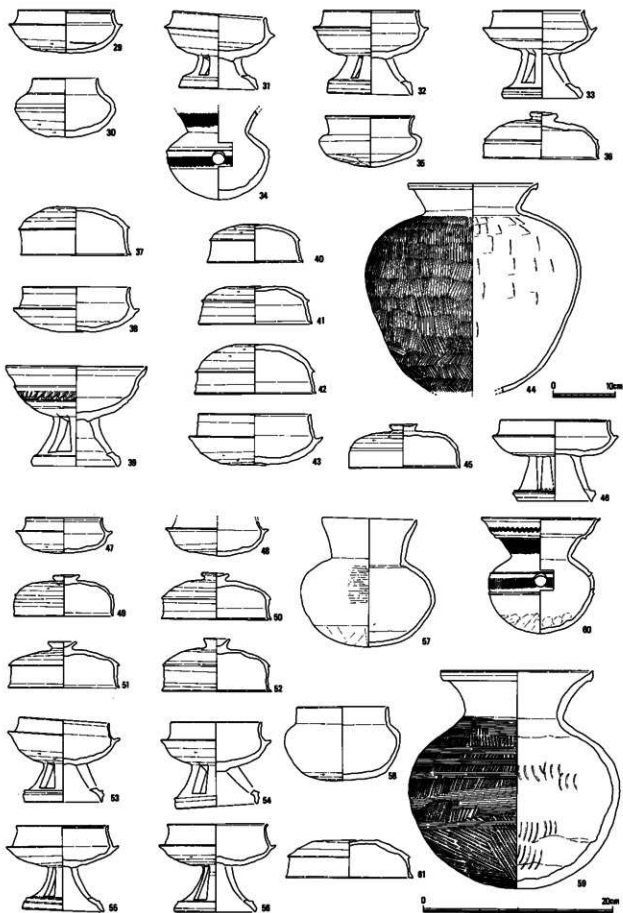
古墳番号	地区名	時期	規模(m)	周溝幅(m)	周溝深(m)	方位	主な出土遺物	備考
4 1	A地区	5世紀後半	13.5×12.6	1.8～2.65	0.3～0.45	N37° E	須恵器杯身・杯蓋・高杯・磁器・土師器高杯・円筒埴輪	南溝で須恵器杯蓋・磁器が倒れた状態で出土。
4 2	A地区	5世紀後半	9.3×—	1.15～2.0	0.18～0.2	N33° E	須恵器杯身・杯蓋・土師器高杯・円筒埴輪	東溝で須恵器杯身・杯蓋をえられた状態で出土。
4 3	A地区	5世紀末	10.0×11.9	1.9～2.65	0.2～0.3	N33° E	須恵器杯身・杯蓋・高杯・磁器・土師器高杯・円筒埴輪	
4 4	A地区	5世紀後半	6.0×5.6	0.6	0.15～0.2	N49° E	須恵器杯身	東溝で須恵器杯身1個体出土。
4 5	A地区	5世紀後半	10.2×9.0	1.55～2.2	0.15～0.3	N33° E	須恵器形埴輪・杯身	東溝で須恵器形埴輪が倒れた状態で出土。
4 6	A地区	不明	8.7×8.2	1.0～1.4	0.2	N24° E	須恵器土師器	
4 7	A地区	5世紀末	9.0×9.6	1.55～2.4	0.25～0.6	N41° E	須恵器高杯・高杯・土師器埴輪	
4 8	A地区	5世紀後半	—×—	2.5～2.68	0.28	N19° E	須恵器杯身・土師器埴輪・須恵器形埴輪	西溝で円筒埴輪がずり落ちた状態で出土。
4 9	A地区	5世紀後半	13.4×13.0	3.7～8.04	0.3～0.48	N25° E	須恵器杯身・杯蓋・高杯・磁器・土師器高杯・円筒埴輪・須恵器形埴輪(土師器)	宮庭に遺り出しを持つ。東溝・南溝で須恵器多数出土。
3 4	A地区	5世紀後半	6.2×5.9	0.85～1.1	0.1～0.8	N38° E	須恵器杯身・杯蓋・青蓋高杯	
3 5	A地区	6世紀前半	8.0×7.5	0.9～1.55	0.2～0.28	N34° E	円筒埴輪・須恵器形埴輪(人物埴輪)	東溝で人物埴輪出土。
2 8	B地区	6世紀前半	13.5×13.0	3.1～3.32	0.42～0.56	N17° E	須恵器杯身・杯蓋・高杯・磁器・土師器埴輪・須恵器形埴輪(土師器)	西・北溝は第3次調査。南溝で須恵器出土。
3 2	B地区	5世紀末	9.0×8.5	1.55～1.7	0.22～0.34	N31° E	須恵器杯身・杯蓋・土師器	
3 6	B地区	不明	10.3×—	1.1	0.22	N20° E	須恵器埴輪	西溝は第3次調査。
3 9	B地区	5世紀末	6.2×6.6	0.75	0.2	N29° E	須恵器土師器高杯・土師器埴輪	西溝で須恵器高杯・土師器埴輪が倒えられた状態で出土。
5 0	B地区	不明	—×5.1	0.8	0.2	N37° E	なし	
5 1	B地区	不明	—×—	—	—	N19° E	須恵器杯蓋片	
5 2	B地区	不明	—×—	1.3	0.32	N 8° E	須恵器杯蓋片・埴輪片	
5 3	G地区	5世紀末	7.0×—	0.92	0.2	N25° E	須恵器高杯・有蓋高杯・蓋・土師器高杯・円筒埴輪	北溝で須恵器高杯・蓋・土師器高杯が倒えられた状態で出土。
5 4	G地区		4.2×—	1.6	0.28	N71° E	須恵器杯蓋	
5 5	F地区		—×13.7	3.34～8.16	0.3～0.16	N12° E	須恵器杯身・杯蓋・土師器高杯・土師器埴輪・須恵器形埴輪(人物埴輪)	東側に遺り出しを持つ。南溝で須恵器出土。
6 1	立会調査区	不明	—×9.0	2.5	0.2	N26° E	円筒埴輪・須恵器	
6 2	立会調査区	不明	—×—	—	—	不明	円筒埴輪	
6 3	試掘調査区	不明	—×—	2.0～6.0	0.6	不明	円筒埴輪・須恵器	

第1表 古墳一覧表

*規模(m)は、東西方向×南北方向に統一し、周溝の内径で計測。
*方位は、座標北を基準に計測。
*56号墳から60号墳については、鉾田市教育委員会平成7年調査。



第10図 主な出土遺物実測図 (1~8: 41号墳, 9~11: 42号墳, 12~20: 43号墳, 21: 44号墳, 22~24: 45号墳, 25~28: 47号墳) (7・8は1:6, その他は1:4)



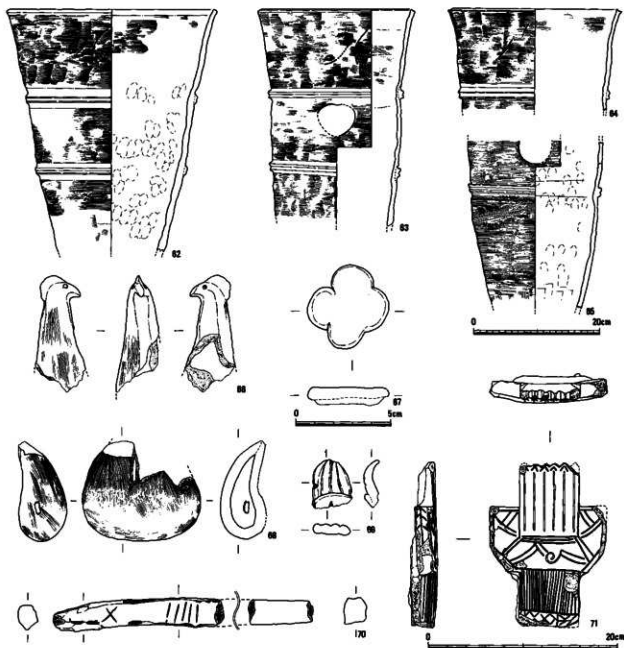
第11図 主な出土遺物実測図 (29・30：48号墳，31～35：49号墳，36：34号墳，37～39：28号墳，40～44：32号墳，45・46：39号墳，47～60：53号墳，61：54号墳) (44は1：6，その他は1：4)

発掘 番号	図名	遺構 出土位置	法量 (cm)			調整技法の特徴	土質	焼成	色調	残存	備考
			口徑	器高	その他						
1	027-03	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	10.3	4.5 受塵径 13.7	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	羅砂粒含む	良	N-2/0黒 SY6/1灰	口径5/8 受塵1/2	岡崎田4群
2	027-04	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	11.5	5.0 受塵径 14.5	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	羅砂粒含む	良	7.5Y-7/1 灰白・NY 9/0-灰白・N6-灰	口径3/8 受塵1/2	岡崎田4群 底面外部へラ記号
3	009-03	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	11.6	10.1 底径 9.5	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナデ	羅砂粒含む	良	5Y6/1灰	口径1/2	長方形スッ孔三方
4	027-01	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	10.7	10.6 底径 9.5	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナデ	羅砂粒含む	良	5Y7/1灰白	口径3/8 底面3/8	岡崎田4群 長方形スッ孔三方
5	005-01	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	11.1	10.2 11.0 底径 9.1	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナデ	羅砂粒含む	良	5Y7/1灰白 SY6/1灰	口径3/4 底面3/8	岡崎田4群 長方形スッ孔三方
6	028-01	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	13.1	— 体径 11.5	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	羅砂粒含む	良	N4/0灰 5Y6/1灰	口径3/4	
7	008-01	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	44.0	— —	内 外 ロクロナデ 1/2タタキ	羅砂粒含む	良	10YR7/2-7/3 10YR7/1・10YR3/1	口径1/4	No. 8と同じ体
8	021-01	須賀野 杯 身	41号塚 北 溝	—	— 底径 32.8	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	やや硬 ～2mmの砂粒	良	10YR7/2に灰・黄褐色 10YR7/1灰	底面3/4	No. 7と同じ体
9	025-03	須賀野 杯 身	42号塚 東 溝	13.6	4.5 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	密 ～3mmの砂粒	良	2.5Y5/2暗灰黄	1/2	
10	025-01	須賀野 杯 身	42号塚 東 溝	11.1	4.75 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	密 ～3mmの砂粒	良	10YR6/3に灰・黄褐色	ほぼ完形	
11	025-02	須賀野 杯 身	42号塚 東 溝	12.0	4.65 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	密 ～3mmの砂粒	良	2.5Y7/2灰黄	1/4	
12	027-02	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	12.9	5.3 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	羅砂粒含む	良	N5/6灰	2/3	
13	005-02	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	13.1	4.7 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/3ロクロナデ	密 ～1mmの砂粒	良	5Y6/1灰	1/8	
14	026-02	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	—	— 底径 8.8	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	羅砂粒含む	良	N6/1灰	1/2	スッ孔三方
15	005-03	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	—	— 底径 8.5	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	密 ～1mmの砂粒	良	N5/0灰	1/2	長方形スッ孔三方
16	006-02	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	8.6	— 体径 10.3	内 外 ロクロナデ 1/2ロクロナデ	密 ～1mmの砂粒	良	5Y6/1灰	1/4	
17	005-04	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	—	— 体径 10.4	内 外 ロクロナデ 1/4ロクロナデ	密 ～1mmの砂粒	良	N4/0灰	3/4	
18	006-03	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	—	— 体径 12.2	内 外 ロクロナデ タタキ・1/4タタキ	密 ～1mmの砂粒	良	N5/0灰	体径1/2 底面完形	
19	006-01	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	9.3	— —	内 外 ロクロナデ タタキ	密 ～1mmの砂粒	良	N6/0灰	1/3	
20	005-01	須賀野 杯 身	43号塚 北 溝	12.4	— 体径 17.2	内 外 ロクロナデ/須賀ユビオサエ ロクロナデ・1/4ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	5Y6/1灰	2/3	
21	025-03	須賀野 杯 身	44号塚 北 溝	12.4	4.4 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	密 ～3mmの砂粒	良	10YR6/2灰黄褐色	ほぼ完形	
22	007-02	須賀野 杯 身	45号塚 北 溝	11.6	4.8 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	砂粒含む	良	5Y7/1・6/1 灰白 2.5Y7/2 灰白	受塵 5/8	
23	007-01	須賀野 杯 身	45号塚 北 溝	12.0	4.8 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	砂粒多く含む	良	5Y7/1・7/2 灰白 2.5Y6/3 に灰・黄褐色	口径 5/8	
24	024-01	須賀野 杯 身	45号塚 北 溝	17.6	28.7 29.5 底径 18.8	内 外 ロクロナデ/須賀ユビオサエ ロクロナデ	やや硬 ～1.5mm砂粒	良	7.5Y7/1・5Y7/1 灰白 5Y6/1 灰・10Y3/1	3/4	
25	013-02	須賀野 杯 身	47号塚 西 溝	8.6	9.95 底径 7.8	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/5ロクロナデ	やや硬 ～1.5mm砂粒	良	N4/0灰	口径1/3 底面完形	
26	002-05	須賀野 杯 身	47号塚 西 溝	—	— 底径 9.6	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	羅砂粒含む	良	N5/灰	7/8	
27	028-02	須賀野 杯 身	47号塚 西 溝	7.0	8.3 体径 11.0	内 外 ロクロナデ 1/4ロクロナデ・1/4タタキ	密 ～1mm砂粒	良	5Y5/1灰	口径3/4 その底面完形	底面外部へラ記号
28	003-01	須賀野 杯 身	47号塚 西 溝	18.4	— —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ	砂粒多く含む	良	10Y5/1灰	2/3	
29	016-01	須賀野 杯 身	48号塚 西 溝	10.1	4.56 —	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナデ	羅砂粒含む	良	2.5Y6/3 に灰・黄褐色	ほぼ完形	
30	016-03	須賀野 杯 身	48号塚 西 溝	6.9	6.3 体径 10.4	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/3ロクロナデ	羅砂粒含む	良	5GY5/1オリーブ灰	1/2	
31	001-02	須賀野 杯 身	49号塚 北 溝	9.8	8.3 底径 8.3	内 外 ロクロナデ ロクロナデ・1/5ロクロナデ	羅砂粒含む	良	5Y6/1灰	1/4	長方形スッ孔三方

第2表 出土遺物観察表(1)

番号	登録番号	種類	遺跡 出土位置	法 量 (cm)		調査技法の特徴	胎土	焼成	色 調	残 存	備 考
				口径	器高						
32	001-02	瓦器 高 杯	49号墳 北	10.5	8.8 底 径 8.9	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/5ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	10Y R 7 / 1灰白	1 / 3	長方形スカーン孔三方
33	001-03	〃	〃	9.75	9.3 底 径 8.2	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/5ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 5 / 1灰	1 / 2	長方形スカーン孔三方
34	001-04	〃 盛	〃	—	— 体部径 10.8	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ	縹砂粒含む	良	2.5Y 5 / 1黄灰		
35	003-03	〃 瓦器	〃 東 溝	9.4	5.4 体部径 10.8	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ヘラケツリ	砂粒多く含む	良	2.5Y 4 / 1黄灰 5Y 6 / 1灰	1 / 2	
36	003-04	〃 杯 蓋	〃 34号墳 南	12.2	4.9 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	N 5 / 灰 2.5Y 7 / 1灰白	1 / 2	
37	016-02	〃 杯 蓋	〃 28号墳 南	11.6	5.1 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	2.5Y 7 / 1灰黄	1 / 3	
38	003-06	〃 杯 身	〃	11.4	4.8 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 5 / 1灰	1 / 3	
39	003-02	〃 高 杯	〃 東 溝	14.9 15.2	10.5 10.8 底 径 9.4	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/3ロクロナゲ	砂粒多く含む	良	N 6 / ~5 / 灰	口縁1/3 脚部2/3	
40	010-01	〃 杯 蓋	〃 32号墳 西南	10.1	4.1 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	7.5Y 6 / 1灰		
41	007-04	〃 杯 蓋	〃 南 溝	12.0	4.0 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 7 / 灰白・N 5 / 灰 5Y 6 / 1灰	1 / 2	
42	007-05	〃	〃 東 溝	12.8	5.2 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 6 / 1.5 / 1灰	1 / 3	
43	007-03	〃 杯 身	〃	12.0	5.4 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	2.5Y 7 / 2灰黄 10Y R 6 / 3泥ふい黄灰	ほぼ完存	
44	029-01	〃 蓋	〃	20.5	— 体部径 34.0	内 外 内 外 口縁ロクロナデ・底部工具ナデ 口縁ロクロナデ・底部タタキ	縹砂粒含む	良	2.5Y 5 / 1黄灰	口縁ほぼ完 存・底1/5	
45	010-02	〃 杯 蓋	〃 30号墳 西南	11.7	4.4 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	密 ~1.5mm砂粒	良	7.5Y 6 / 1灰		
46	009-04	〃 高 杯	〃	11.4	8.6 底 径 7.8	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 6 / 1灰		長方形スカーン孔三方
47	012-02	〃 杯 身	〃 53号墳 北 溝	8.0	3.7 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	中粒径 ~1.5mm砂粒	良	N 6 / 0灰	口縁3/4 その他完存	
48	014-04	〃	〃	—	—	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 6 / 1灰		
49	011-06	〃 杯 蓋	〃	10.4 10.6	4.35 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	N 7 / 0灰白 N 5 / 0灰	7 / 8	
50	014-01	〃	〃	11.6	5.0 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	N 6 / 灰	4 / 5	
51	011-02	〃	〃	11.5 11.7	4.9 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	N 8 / 0灰白 N 5 / 灰・N 4 / 灰	ほぼ完存	
52	014-03	〃	〃	11.6	5.7 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 5 / 1灰	3 / 4	
53	011-01	〃 高 杯	〃	9.6	8.95 脚部径 8.1	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	N 7 / 0灰白 N 5 / 0灰	ほぼ完存	長方形スカーン孔三方
54	011-05	〃	〃	9.4	10.1 脚部径 8.8	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	一般 不良	N 8 / 0灰白 N 7 / 0灰白	ほぼ完存	長方形スカーン孔三方
55	015-01	〃	〃	9.8	9.15 脚部径 8.7	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	7.5 Y 7 / 1灰白	完存	長方形スカーン孔三方
56	011-03	〃	〃	10.6	9.3 脚部径 8.7	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	2.5GY / 1脚オリーブ灰 N 7 / 0灰白	口縁1/4 その他完存	長方形スカーン孔三方
57	009-01	土師器 瓦 甕	〃	9.8	13.5 体部径 14.2	内 外 内 外 口縁土師器・体部ナデ 口縁土師器・ヘラミガキ・ケツリ	縹砂粒含む	並	5Y R 6 / 8黄	完存	
58	012-01	瓦器 瓦 甕	〃	9.5	7.8 体部径 12.2	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	5Y 7 / 1灰白 N 5 / 0灰	3 / 4	
59	022-01	〃 蓋	〃	16.0	23.0 体部径 22.4	内 外 外 内 ロクロナデ・同心円タタキ ロクロナデ・タタキ	縹砂粒含む	良	10B G 5 / 1黄灰 N 6 / 0灰		
60	010-03	〃 盛	〃	12.4	12.2 体部径 11.2	内 外 外 内 ロクロナデ・1/5ユビオサエ ロクロナデ・1/4ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	10G Y 6 / 1黄灰 2.5 Y 7 / 3黄		
61	009-02	瓦器 杯 蓋	〃 54号墳 北 溝	13.4	4.0 —	内 外 外 内 ロクロナデ ロクロナデ・1/2ロクロナゲ	縹砂粒含む	良	2.5Y 6 / 1黄灰 5Y 5 / 1灰		外面天井面に重焼き の痕跡

第3表 出土遺物観察表(2)



第12図 主な出土陶輪実測図 (62~65: 48号墳, 66・67: 49号墳, 68~71: 28号墳)
(62~65は1: 6, 67は1: 1, その他は1: 4)

発 掘 番 号	遺跡 出土位置	出 土 品 名	出 土 量 (cm)	容 積 (cm ³)	容 積 高 さ	形 態	大 小	外 面 装 飾 (ハケメ本数/cm)			内 面 装 飾	胎 土	焼 成 色 調	残 存 度	備 考
								一 段	二 段	三 段					
62	018-01	鉢 西	32.6	34字 5.3	2.0	円形	—	ヨコハテ 7本	ヨコハテ 7~10本	ヨコハテ 7~8本	ヨコハテ —	中や弱 —	7.5YR7/6 7.5YR7/6	口縁部 2/3	へら記号あり
63	019-01	鉢 西	25.0	34字 5.3	2.4	円形	4.9	ヨコハテ 8本	ヨコハテ 8本	ヨコハテ 8本	指オナエ	細砂粒多く 含む	5YR7/4 5YR7/4	口縁部 3/8	へら記号あり
64	002-01	鉢 西	27.6	34字 5.3	1.8	円形	0.6	—	—	ヨコハテ 5~6本	ヨコハテ ナシ	細砂粒含む	7.5YR8/4 7.5YR8/4	口縁部 1/2	へら記号あり
65	020-01	鉢 西	—	34字 5.3	1.8	円形	(5.2)	クマハケ後ヨ コハテ6~8本	ヨコハテ 6~8本	—	指オナエ	細砂粒含む	5YR7/4 5YR7/4	—	—

第4表 出土陶輪観察表 (円筒埴輪)

発 掘 番 号	遺跡 出土位置	出 土 品 名	出 土 量 (cm)	容 積 特 徴	胎 土	焼 成 色 調	残 存 度	備 考
66	025-04	輪	長さ12.5	内面、外面ともナシ	細砂粒含む	黒	10YR7/6弱黄褐色	断面のみ
67	004-02	辻金具	長さ4.5×4.3 幅2.1×1.6	内面、外面ともナシ	細砂粒含む	黒	7.5YR7/6	完全
68	017-01	不明	長さ12.5×(10.6) 幅5.0	ハケメ7~8本/cm	細砂粒含む	黒	10YR7/6弱黄褐色	3/4 中や弱 3方内装孔あり
69	017-02	人物土	長さ5.3 幅2.1	内面、外面ともナシ	細砂粒含む	黒	10YR7/4Cいぼ	4/5 此人焼輪の手か?
70	017-03	大刀	長さ25.0 幅3.2	内面、外面ともナシ	細砂粒含む	黒	5YR7/4Cいぼ	4/5 へら記号あり
71	004-01	靴	長さ14.8×12.3 幅2.8	内面、外面ともナシ	細砂粒含む	黒	7.5YR6/6	断面分だけ残存 断面装飾あり 断面装飾

第5表 出土陶輪観察表 (形象埴輪)

Ⅳ. 小 結

平成5年度から行われてきた石薬師東古墳群・石薬師東遺跡の調査は、今回で第4次調査となる。各調査地区が離れている部分もあるが、発掘総面積は10,000㎡を越え、ある程度面的に古墳群の調査を行うことができた。ここで、今までの成果の要点をまとめるとともに、若干の予察を行いたい。

1・規模について

これまで、石薬師東古墳群は25基の円墳から成る古墳群と考えられてきた。しかし、発掘調査で確認できた古墳の墳形は全てが方墳である。戦時中、この石薬師東古墳群の周辺には、陸軍の第1気象連隊の施設が建設され、ほとんどの古墳の墳丘が削平を受けてしまった。そのため、周溝部分しか検出できなかったが、平成5年度の発掘調査で確認をした古墳を26号墳と称してから、今回のF地区での55号墳までで合計30基となり、少なくとも30基以上の方墳から成る古墳群であることが判明してきた。

この30基の古墳の規模を検討してみると、ある一定の企画性が考えられそうである。具体的な数字をあげてみると、一辺の長さが $13.5\text{m} \times 10.5\text{m} \times 9\text{m} \times 7.5\text{m} \times 6\text{m}$ の5種類の大きさにほぼ分類が可能である。ここでの数値は、周溝間の内法である。古墳の規模を測定する際に、周溝の芯々距離を基準にすることが多いが、今回調査を行った古墳の周溝の平面形態を観察してみると、周溝内側のラインが直線的であるのに対して、外側は弧を描く様な状況が多く見られ、中にはいびつに広がるものもあった。この差異は、当然のことながら古墳の築造に際して内側が重視されたことによるものと考えられ、古墳の規模決定の基準は、内側におかれたものと思われる。そこで、ここでは内法の長さで測定した。

当然墳丘の削平があり、築造当時そのものの数値ではないことは明らかである。しかも、墳丘が一樣に削平されたわけではないために不確実な要素も含むが、大きさの5種類に基準がありそうである。すなわち、上述した5種類の数値がすべて1.5mの倍数となることである。この1.5mというのは、女性が両手を一杯ひろげた長さ、小尋に相当する。

当時、古墳築造に小尋を使用したとは即断できないが、何らかの基準尺度が存在していたことは十分に考えられる。他の古墳を含め、今後検討を加えていかなければならない課題である。

2・方向について

古墳の方向についても企画性が考えられそうである。各々の古墳の方向は、概ね $\text{N}30^\circ\text{E}$ から $\text{N}40^\circ\text{E}$ の間におさまる。これは、この古墳群の所在する標高40m前後の丘陵が、北西から南東方向にかけて伸びるという地形的な制約に関わるものなのかもしれない。しかし、30基を越える古墳を築造するに当たって、何らかの方向規制が働いていたと考えても不思議ではないだろう。

3・時期について

出土遺物は、各古墳とも須恵器・土師器・埴輪に限られる。時期決定には、埴輪の編年を使用するのが適当と思われるが、埴輪を有しない古墳も存在することから、ここでは須恵器によって時期を決定したい。

平成5年度行われた第1次調査の26号墳と、平成6年度に行われた第3次調査の古墳群の築造は、概ね6世紀前半代である。しかし、今回調査を行ったA地区の41号墳や45号墳などは5世紀後半の築造である。個々の古墳の詳細な築造時期および築造順については、出土遺物の詳細な検討を要するが、傾向として西から東側にかけて古墳が築造されていたものと考えてよさそうである。

さらに周溝の平面形態を観察してみると、5世紀後半の古墳と6世紀前半代の古墳とは違いが存在する。すなわち、41・45号墳などの5世紀後半の周溝は外側が直線的にならず弧を描いたり湾曲したりするのに対して、28号墳などの6世紀前半代の周溝は内側外側ともに直線的である。この傾向を出土した遺物において見てみると興味深いことが言える。5世紀後半の古墳からは須恵器器台が出土しているのに対して、6世紀前半代の古墳からは器台の出土を見ない。これは、6世紀を境に器台を使用した古墳での祭祀形態が変化すると対応して、古墳の

平面形態にも影響を与えたものではなからうか。この点についても、各古墳が所有する遺物の器種の相違および出土位置等の検討を要する課題である。

4・位置関係について（第13図）

各古墳の位置関係について、A・B地区を中心に詳しく見ていくことにする。

第1に空間地帯の存在である。具体的には45・47・49号墳と46・48号墳との間のことである。これまで30基確認されている古墳群は、あまり隣りなく存在するにもかかわらず、この部分だけは古墳が存在しない。しかも、この空間地帯は古墳群の並ぶ方向と平行することから、墓道的なものである可能性も考えられる。

第2に、大きさを5種類に分類した古墳群が計画性をもって配置されている可能性があるということである。前述した45・47・49号墳の3つの古墳の中心は一直線に並ぶ。ここでいう古墳の中心とは、方墳四隅の対角線の交点である。さらに、中心の2点間の距離は21mであり、45号墳の一边の長さである

10.5mのちょうど2倍となる。遺物の詳細な検討を要するが、45号墳を基準に考えると、この一边の長さ10.5mを意識して47・49号墳が造営されていたのではないかと思われる。

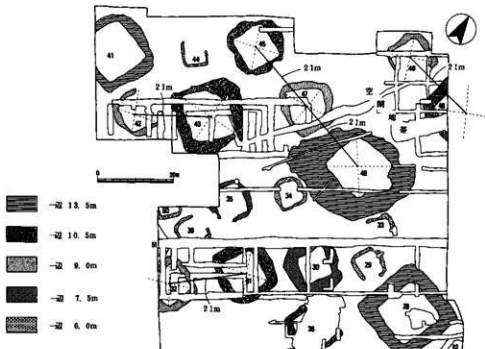
一边が10.5mという長さの古墳は、他に43・31・48号墳がある。それぞれに、方向に違いはあるものの、21m離れた地点に42・32・46号墳の中心が位置する。しかもこの3つの古墳の一边がすべて9mである。さらに、45・47・49号墳の3つの規模の古墳の関係が他の古墳にも通用すると仮定するならば、43・42号墳の並ぶ直線上の21m離れた所に一边13.5mの古墳が、31・32号墳の並ぶ直線上の21m離れた所に一边13.5mの古墳が、48・46号墳の並ぶ直線上の21m離れた所に一边13.5mの古墳が存在する可能性もある。

なお、今回の報告では割愛するが、周溝の底に須恵器を据え置いた状況の古墳がいくつか存在している。その遺物の時期、器種、出土位置などの検討を今後の課題として、来年度の調査に期待したい。

【註】

- ① 鳥取県教育委員会調査分と試掘調査・立会調査分を含めると、計38基となる。
- ② 平成5年度調査の26号墳は、東西方向21m南北方向19mで、この5つの分類には当てはまらない。したがって、正しくは6つ以上の分類が想定される。
- ③ 石塚正志・田中英夫・宮川 彰・藤田啓一「前方後円墳築造論の基幹と序位」(『考古学ジャーナル』-特集・古墳の企画性-I、No150・6月号) ニューサイエンス社・1978年
- ④ 26号墳の規模は、前述の21m×19mであるが、21mは11.5mの倍数である。

- ⑤ 田辺昭三『特色古墳群』(平安学考古学クラブ・1966年)と中村浩『岡邑田』(大府府教育委員会・1979年)をともに参考にした。
- ⑥ 基合古墳群では、5世紀代の方墳は周溝幅が一定で、6世紀代の古墳になると周溝幅はいつくなる。この傾向は、地域における差であろうか? (伊藤裕隆ほか『近畿自動車道(和歌山-伊勢) 埋蔵文化財発掘調査報告第一分冊一 基合古墳群』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター・1992年)

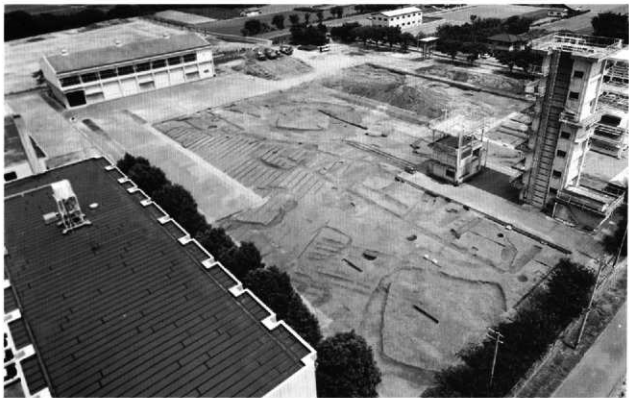


第13図 A・B地区古墳配置図(1:1,000)

図版 1



A・B地区全景（垂直・右上が北）



A・B地区全景（西方上空から）



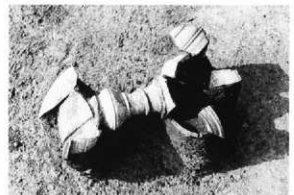
A地区（東から）



A地区49号墳（南西から）



A地区41号墳（南東から）



A地区45号墳筒形器出土状況（北から）



A地区48号墳遺物出土状況（北東から）



B地区28号墳遺物出土状況（南から）



C地区全景（南から）



D地区全景（西から）

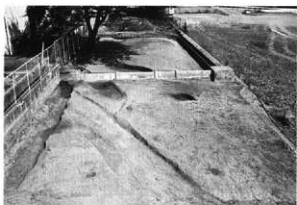
図版 3



E地区 (東から)



F地区全景 (西から)



G地区全景 (南から)



G地区53号墳遺物出土状況 (西から)



41号墳出土遺物



41号墳出土遺物



42号墳出土遺物



43号墳出土遺物



44号墳出土遺物

45号墳出土遺物



48号墳出土遺物

34号墳出土遺物



47号墳出土遺物



28号墳出土遺物



49号墳出土遺物



39号墳出土遺物



54号墳出土遺物



32号墳出土遺物



53号墳出土遺物



32号墳出土遺物



45号墳出土遺物



48号墳出土遺物



49号墳出土遺物



49号墳出土遺物



28号墳出土遺物



48号墳出土遺物



28号墳出土遺物



28号墳出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	いしやくしひがしこみんぐん・いしやくしひがしいせき							
書名	石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第4次）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	142							
編著者名	服部芳人・筒井正明							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしやくしひがしこみんぐん 石薬師東古墳群	いしやくしひがしこみんぐん 三重県鈴鹿市 いしやくしひがしこみんぐん 石薬師町字寺東	207	9930 ～ 9954	34 54 10	136 33 30	19950410 ～ 19950901	6,300	三重県消防学校施設・設備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
石薬師東古墳群	古墳	古墳時代	41号墳～55号墳 61号墳～63号墳	須恵器・土師器 円筒埴輪・形象埴輪		方墳だけで構成される古墳群		

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 142

石薬師東古墳群・石薬師東遺跡(第 4 次)

発掘調査概要

— 鈴鹿市石薬師町 —

1996 年 3 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 オリエンタル印刷株式会社